

1925年から1927年までの
パウル・エストライヒの諸論説から

——ドイツ教科教授史研究 (IV)——

船尾日出志

Hideshi FUNAO

(哲学教室)

Aus den Schriften von Paul Oestreich in den Jahren 1925-1927.

——Ein Studium über die deutsche Fachunterrichtsgeschichte (IV)——

Hideshi FUNAO

(Lehrstuhl für Philosophie)

Resümee

In diesem Aufsatz handelt es sich um die Darstellung der Ergebnisse unseres sorgfältigen Durchsehens von P. Oestreichs einigen Schriften in den Jahren 1925-1927.

Mit dem Artikel "Ein Fußtritt" (1925) rechnet Oestreich wiederum mit den rechten SPD-Schulpolitikern ab. Der Artikel "Die Begabung der Begabten" (1926) ist seine Auseinandersetzung mit Dr. Wilhelm Hartnacke, Stadtschulrat von Dresden, der mit seinen reaktionären biologischen und rassenkundlichen Begabungstheorien zum Wegbereiter der faschistischen Pädagogik wurde. Darauf haben wir folgende Erkenntnisse durch das Durchsehen von seinen weiteren Schriften in der Jahre 1927 gewonnen: "Prüfel als Schul-'Strafe'?" ; "Sind Kolonien Erzieher zu volklicher Persönlichkeit?" ; "Die Not Front!".

(1) Aus humanistischer Haltung wendet sich er gegen die Prügelstrafe.

(2) Er hat zusammen mit seinem Kampf gegen Nationalismus, Chauvinismus, Rassismus und Militarismus den fortschrittsfeindlichen und antidemokratischen Charakter der Kolonialpropaganda als einen wesentlichen Bestandteil der ständigen intensivierten imperialistischen Erziehung angegriffen.

(3) Besonders eingehend hat er sich mit den Bestrebungen reaktionärer Kräfte auseinandergesetzt, durch Wiederherstellung der konfessionellen Gebundtheit aller Volksschulen den Einfluß fortschrittlicher politischer und weltanschaulicher Lehren

zurückzudrängen.

1. 論述の方針と当研究の制約性

当論稿はエストライヒ研究に関する第4報¹⁾になる。ここではまずエストライヒ研究の意義把握をあらためて叙述したい。

「生活・生産共同体学校をその実現構想の核となす彼の教育思想は……人間の内面世界に関わる形成作用と人間の政治的・経済的規定性の両基軸のいずれの一方にも偏することなく、両者の統一的な把握を企図するものであった。」(川口祐二「パウル・エストライヒの教育思想における人間形成と社会変革」『教育学研究』第48巻第3号, 1981年9月, 213頁)という先行研究者のエストライヒの教育思想規定がある。もちろん研究の成果としてのそのような規定は参照にあたいする(川口祐二の研究および共同翻訳成果を知ることなしに、筆者はエストライヒ研究に着手することはなかった。その優れた成果と鋭い洞察に感謝する立場である)。しかし千を越えるエストライヒの論説のごく一部を読んだだけで、性急にそのような規定をおこなって、先入観をもってエストライヒを考察することは、誤りを犯しうる。筆者は時代、状況、課題によって揺れ動いた人間エストライヒの論説を忠実に熟読したいと考えている。そしてそのことが重要であると考えている。

論述方法、テキスト出典は第1～3報までと同様である。ここで考察の対象とされるのは1925年から1927年までのテキストであり、SPD 幹部批判, 反動的能力論批判, 体罰批判, 植民地政策批判, 学校教育政策の一層の反動化批判等が問題となっている。

ここでぜひ筆者のエストライヒ研究の限界性についてもふれておく必要がある。出典がDDR の教育史研究者によって選ばれ、抜粋され、編集された論集であるゆえに、出発点から厳密性・公平性を欠いていると批判されれば、同意せざるをえないからである。

2. 各テキストから

以下では「」内は原則としてエストライヒの叙述, 『』内はエストライヒ自身による引用等, ()内はエストライヒによる説明等, 《 》内は筆者の補足であり, 補足内容は出典書の編者の解説によっているが, そうでない場合は特に参考文献を記述する。そしてその他は筆者によるテキストの要約等である。また下線はエストライヒ自身による強調で, もともとはイタリック体で記述されていた。さらに2重下線はもともとはゴシック体で記述されている部分である。項目番号に続く下線部は筆者がテキストの内容を性格づけたものである。またエストライヒが頻繁に使用する感嘆符は敢えてそのまま残した。

(1) 右派 SPD 指導者との清算——論説「足蹴」より²⁾

『「ディー・ノイエ・エアツィーウンク (新教育)」誌の1925年第9号に掲載された当論説でもって, エストライヒは再度右派 SPD 学校政策家にたいして決着をつけている。同時に, 右派 SPD 幹部が虚仮威しによって, あるいは懐柔によってエストライヒを沈黙させるか, あるいは自身側に引き抜こうとしていたということもまた示される。』

『『一般ドイツ教員新聞』(第29号1925年7月25日付け)《“Allgemeine Deutsche Lehrerschaft”はドイツ教員組合の機関紙である。》は次の記事を掲載している。『国家書記官インリッヒ・シュルツ《Schulz, Heinrich【1872-1932】》は新聞報道によると, かれの共和国議会での議席の行使のために, 共和国内務省を去ったということである。元々亡霊のよ

うなものでしかない者が、かなり重要性を失っていた省の学校局を退りぞいたのである。そこではかれはすでに以前から窓際へと押しやられていたのであるが。共和国文化政策の初期の基礎づけにたいする幾つかの貢献にもかかわらず、かれはその政策の諸課題よりもより小さな政策家のひとりであると評価されざるをえない。かれは最初の共和国学校法案を議会で責任をもって擁護する立場をとり、そしてそれでもってかれによって創出されたワイマール学校妥協に最初の歪曲的・邪道的解釈を与えることを手助けして以来、共和国学校思想の信奉者たちのなかでのかれの影響力は消失していた。……共和国学校思想の歴史のなかでかれは多く約束したが、しかしほとんどその約束をまもりえなかったひとつの勢力としてみられるであろう。わたしたちは、学校領域における共和国の諸課題のために働くより良い機会を、官職上の地位においてかれに与えられていたよりも、むしろ議員としてかれが得ることを願う』。

それゆえまさに足蹴であり、寛大になりがちな罷免辞令文ではない。わたしでも確かに上の文章のそれぞれを、一語一語その通りに書きえたであろう。そして事実、わたしはその一語一語のすべてを書いてきた。ただし — 6年前にそしてそれ以来繰り返して。そして当時はあらゆる者が狼狽して「パウル・エストライヒの率直さ」とごまかした。

今やわたしにはそのカトーイズム《元々は古代ローマの監察官カトーの仕方にしたがったの意味、転じて非常な厳しさでもっての意味》も当然すぎる。 — ハインリッヒ・シュルツはわたしの批判のゆえに、小心な人間らしく、わたしに狂暴な憎悪を投げかけた。かれは、コンラッド・ヘーニッシュ《Haenisch, Konrad【1876-1925】：ワイマール共和国プロイセン邦初代文部大臣の一人、SPD 党员》がそうであったように、かれの近くに安寧の攪乱者、定評ある性格強固さや揺るぐことのない誠実さおよび原則忠実さを有する人間がいることに耐えられなかった。わたしにはその事情からわかるように — わたしはそれらの関連をすべて確実に知っておりそして将来暇なときにその難破時代のなお多くの不明の曲がり角に明かりを照らさねばならないだろう — ベルリンにおけるわたしのエネルギーとわたしの能力のための発揮可能性は閉ざされていたし、そして — パウル・エストライヒは校長職のようなもので『満足』させられないし、原則に背いたり、同罪になることはなかった。かれは《エストライヒのこと》まさにより高い給与を支払われている上役、教授や教育と無縁な書類好きの頑固な長官の廃止を欲しそしてそのことに真剣に取り組んだ。そのことは、『現存の諸関係の内部』で『上昇』したかった人々すべてにとって不快であった。かれらは君臨者的不決断性の従順な道具や太鼓持ちとなった。しかし今では — 獅子の皮ははがされておりそして灰色の皮は透けてみられている — 多くの者は気楽に叫ぶ：その通り。その叫びは多義的である：同情か、あるいは怒りか。

— わたしは完全に哀れみとともに言う。ハインリッヒ、君は気の毒な人だ。』《最後の言葉についてエストライヒ自身が次のような長い脚注をつけている。》

「もちろんさらにより以上にわたしは SPD の『文化』政策を気の毒に思う。それは今や再び国家書記官ハインリッヒ・シュルツ閣下の主要『統治』要件となるはずである。今年の5月に、ある社会民主党の連邦議會議員がゲルリッツにおける400人の聴衆を前にしての公的集会のなかで次のように語ったことはまさにここ数年来の公然の秘密である。『前、まだ国家書記官ハインリッヒ・シュルツが共和国内政局において学校局担当であった

ときには、とにかく法案はまだえられた。たとえ中央党議員より数週間遅かったとしても……！』。しかしそんなことは何にもならない！。青年と『文化』をハインリッヒは引き続き世話すること！。かれが今、野党にならざるをえないという理由で、再び『ラディカル』にならないことを望む！。 — 精神のないタレーラン主義《Talleyrandismus, 厚顔無恥な、風見鳥的なフランスの外交官であった Charles-Maurice de Talleyrand-Perigord【1754-1838】的という意味》であったその文化政策のなかで台なしにされた特徴的諸価値とは何かは次のような人のみが判断しうる。つまり舞台裏の情報に通じそして個人的諸関連を知っている人のみが。例えばシュルツ氏がかれの『権力』の絶頂において、つまり1921年ドレスデンにおいて《1921年ドレスデンでの SPD 文化会議のことが考えられている。そこでエストライヒはその他の社会民主党の教師たちとならんで鋭く SPD 指導部の日和見主義的学校政策を批判した。Vgl. Geschichte der Erziehung, 12. Auflage, Volk und Wissen Volkseigener Verlag, Berlin 1976, S. 557f.》かれの新しい・最新の『社会主義的』追随者たち、すなわち今ではそれどころか自らの習得されている問答教科書の知恵を『党』規範として朗読することを許されているローマン《Lohmann, Richard【geb. 1881】：社会民主党の学校政策家、学校組織の問題でかれは幼稚園から大学までの統一学校および16歳までのすべての子どものための共通の民衆学校のプランを発展させた。Vgl. Geschichte der Erziehung, a. a. O., S. 559f.》、カルゼン《Karsen, Fritz, Dr.【1885-1951】：徹底的学校改革者同盟の設立者のひとり。かれは最も影響力のあった教育学者のひとりであったが、見解の相違のゆえに同盟からすぐに離脱した。かれはノイケルンにおいて改革教育学的基礎にもとづいて作業する実験学校を指導した。1945年の後一時アメリカ合衆国の陶冶役人》等にかこまれているところを体験する場合には、かならず次のことを把握できる。すなわち、ここではとてつきあえぬ司令官の下士官であろうとするあらゆる者が歓迎され、ここでは文化戦争において、すすんで敗北を勝利に改作しそして……しかしその場合たいてい — 『忠誠』は空虚な妄想である。それがそのような者のモラルなのである！。』

(2) エストライヒの才能論 — 論文「才能ある者の才能」より³⁾ 《「新教育」誌の1926年第4号に掲載された当論文は、ドレスデンの都市評議員であったハルトナッケ博士〔Hartnacke, Wilhelm【1878-1952】〕とのエストライヒの対決である。ハルトナッケはワイマール共和国のなかでかれの反動的生物学的・人種学的才能理論をもってファッショ的教育学の開拓者となった。かれの『功績』をファシストたちは1933年にザクセンの文部大臣への推挙でもって称えた。》

エストライヒはまず、ハルトナッケの著書にたいする自身の拒絶を明確にするために、次のように述べることから始めている。『……戦争から教育学まで長い道があるように思える。しかし生活の絡みあいを正しく見抜いている者、かれは生徒たちからそして訓練から、『法』と段階分け (Staffelung) から、成績表からそして精神の『貴族化』から戦争が生じるのを見、かれは、『精神』と物質的幸福の結婚ではなく、硬直していない、あらゆる個人のなかでトータルに欲せられる人間性による存在の宗教化《「宗教化」について、筆者はラトケ、ケーニッヒにならって「人道主義、民主主義、社会主義の意味における人間の道德化」⁴⁾と同義語であると理解しているが、他の先行研究者は次のように見解を述べている。BRDのベーム〔Winfried Böhm〕：「道徳性と宗教は……同義語として使用されている。

……エストライヒは文化意志、自らの全体への方向づけ、共同体への奉仕を宗教化でもって特徴づけた。その概念は本来の意味における宗教的教授の形態として、あるいは存在する諸宗教のひとつへの導きとして誤用されてはならない。それどころか一定の宗派の帰依への導きは、エストライヒが宗教化概念でもって考えていたこととまったく逆のことである。」〔W. Böhm : Kulturpolitik und Pädagogik Paul Oestreichs. Verlag Julius Klinkhardt · Bad Heilbrunn / Obb, 1973, S. 186〕；川口祐二：「エストライヒの〈宗教〉は、既成の宗教への帰依を意味していない。むしろそれは、一人一人の個人を生かしながら共同体に根づかせること、一人一人が解放される調和的な共同体を作ることを意味している。」〔前掲論文、213頁〕。筆者は没立場的な用語とは考えず、したがって依然として上記のような意味で把握する。》のみが、膨張する余地がなくなっている地球上で万人の万人にたいする恒常的戦争からわたしたちを保護するというを知っている。あらゆる個人のかねりの完成を、それゆえ地球上の諸国民のおのおののなかで完全に発展させられる人間性あふれる諸現象の際限なき充実を。……そのことを必要かつ唯一の脱出口であると認識している者ならば、ドレスデンの都市学校評議員ハルトナッケ博士がその最新の書物『組織的学校構成』(Organische Schulgestaltung. Kupke u. Dietze, Radebeul-Dresden)のなかで科学的に適確であると提出したような自己諸幻想を断固として拒絶するに違いない。」

エストライヒは続いてハルトナッケの基礎学校および中等学校についての基本的見解を描写する。「ハルトナッケは永く義務制の基礎学校と闘っている。基礎学校からかれは『才能ある者』を引き離そうとしている。かれは — それはかれの人格的特色なのであるが — 次のテーゼを付加している。すなわち、『才能』は高度の潜在力を有する両親の社会的高さと文化的伝統でもって濃くなること、それゆえ中等諸学校に労働者の子どもたちがあまり通わないということは、その階層の実際の『才能』に断じて相応していること。かれはそのことを『証明している』。そして確信をもって『有用な者たち』の促進のための機関としての中等学校を要求している。！」

エストライヒはハルトナッケの「証明」について当然批判的に論述をすすめるが、その際エストライヒが語る体験談が興味深い。ハルトナッケは「『教養ある』諸階層の慣習からとってこられた試験と練習、テストおよび統計を基礎としている。そこでその『教養ある』諸階層が『できる』とされても、何の不思議でもない。！。一定の形式を確実に支配している者、一定の環境のなかで落ち着いて動く者、感じよく表現することを知っている者、生来『正しく』語ることができる者、かれは最初の数学年においてどんなにすごく有利な地位にいることか。！。そのことはわたし自ら体験したことである。！。わたしは知っている。どんなに測りがたくわたしのプロレタリア的独学性《エストライヒの父親は家具工の親方であり、かれ自身はギムナジウムの教授に就くことができた⁵⁾ことを考えると、言葉の真の意味での「プロレタリア」ではないと考えられる。しかし青少年時代にかれの周囲にいた者たちに比べると相対的により上流でない階層出身であったことを表現しているのである。》が、内気な、傷つきやすい心理と結びついて、表現においてわたしを阻害したか、どんなにしばしば傷つきやすい、かつ控え目な恥じらいが口を閉じさせたか、どんなにしばしば遂行抑圧が自己防衛武器として役立ったかを。わたしは知っている。わたしがまだ学生であるとき無器用な劣等性の感情を多くきらきら光る空虚な頭脳にたいして持っていた

こと、しかし全体としてはすぐにその頭脳を凌駕したことを。わたしはまだイルフェルドにおける見習い教員であったときしばしば、周囲を明るくするが、しかし他の場面ではかなり内気で高貴な生徒たちにたいして自分がプロレタリア的で、気が利かないこと、そして遂行力が弱いと感じた。わたしはそのすべてのことを率直に言う。というのはわたしは全体的にかなり剛強な人間であるが、しかしとはいえ常に『教養ある』家庭（あるいはまた、そこにおいては非常に美しく訓練され、磨かれ、伸ばされうる落ち着いたプチブル家庭）出身の息子たちにたいして才能の光沢において数段階劣っていると感じていたからである。……『相続財産』のない大衆の子どもたちは、『相続財産のある』社会性のちゃんとした子どもたちとは違うテンポをもち、それほど知性は働かせられない。そのことは真実である。『もちろんだからといってエストライヒがハルトナッケの「証明」を認めているわけではない。上流階級の諸習慣・諸振舞を基準にしてテストされれば、上流階級出身者が優れた成績を達成できるのは当然のことである。ここではようするに「素質」や「才能」とよばれているものが、絶対的ではないことが述べられているのである。』

エストライヒはハルトナッケにたいして批判を展開する。《まず第1に、個々の人間の能力・才能に差異があることは確かだが、階級の流動化の激しい現実のドイツ社会においてはある階層の人々が才能ある人々であると決して規定できないと主張する。むしろあらゆる人の才能促進こそ今や問題となっているのである。》「しかしハルトナッケは何を証明したのか。社会的個別化は — そのことをかれはあらゆる極道性を身に付けた資本主義推進者、戦争推進者、革命推進者の時代において『証明している』のだが — 間違いなく存在すること、そしてそこから知的『才能』が発達することを。……ハルトネッケは恒常的なものをまさに可変的なものなかで確認しようとしている。強固な身分国家においてはそのすべては議論の余地があるが、わが国では真実ではない。人民のなかで『有能』— 貴族が問題となるという夢想は今や — 地球が狭くなり、すべての人民が互いに知的化されてきてそして拡張への波が退いているところでは — 結局次のような目覚めた意識(Besinnung)に敗北している。つまり人民を生産的にしたいのなら、あらゆる者が、健全な大衆が重要であるという。』

《第2に、人間の才能は一面的な基準にもとづくテストでは把握できない。また現実「才能ある」とされる者も元々は大衆出身であって、後に自分の素性を忘れて「遺伝的素質」で自分は「才能ある」エリートだと思い込んでいるのである、と批判する。》「才能」は全体性として、潜在性しか把握されえないし、そしてその場合すべてのテストは遠ざけられる。すべての者は大衆からわきあがってき……、しかしすべての者はすでに10年後には『遺伝的素質』のなかにひたろうとし、大衆には属そうとせず……。」

《第3に、エストライヒはハルトネッケの遺伝生物学が混沌としていて、神託めいたものであるとしている。例えばその理論に反する個々の事実については意識的に拒絶されているからであると述べる。》「遺伝生物学は完全に混沌とした章であり……その生物学は地質学の広範な章よりもなお神託めいている。それは、そこから、変質を防止しうる一般的な衛生学的諸法則が導き出されるときいつも正当性を与えられ、それは、そこから個人的心理的衛生学が構築されるときには、絶対的に確実に拒まれる。……」

《第4に、エストライヒはハルトネッケの主張には実体が欠けていると批判する。現実のドイツ社会では例えばかつて君臨した皇帝は去っており、逆に民衆は教育の機会を以前

よりはより多くえて、「上昇」しているからである。》「全人民の引き立てであり、『才能ある者』の引き立てではない。というのは国王たちは当然の追放のなかにあり、金持ちたちは真に生産することのない思弁の頭でかちちに由来し、科学は良心と宗教性なしだから！。遺伝的素質を保有するしっかりとした階層はどこにあるのか。……なにゆえかれは『より高い』階層の巨大な没落に注意をはらわないのか……とても脱出不可能である。すべてが押し『上げ』ており、すべてが『才能を与え』られ、すべての中等諸学校が満杯になってパンクしている。婦人もまた『上に』！。そしてそのようなところで……ハルトネッケは『才能』を遺伝的素質であり、そしてある階層が有しているものであると証明しようとしている！。かれには実体が欠けている！。証明されることが前提である！。」

《最後にエストライヒは自分の主張を対置し、ハルトネッケの主張を斥ける。》「そして闘争は続行される — どのような『証明』にもかかわらず！。そして宗教化意志が目覚めないうち、殺人の混乱のなかで終結する。あらゆる者にその者の完全なものを！。財産は2次的なものである！。地球は1軒の家であり、人類はそれぞれに配当された豊かさの集合であり、あらゆる者が自ら闘いとった全体性からすることが可能な遂行におけるすべてをあらゆる者のために。《存在の宗教化のみが、膨張する余地がなくなってきている地球上で万人の万人にたいする恒常的戦争からわたしたちを保護するということを知っている。あらゆる個人のかれなりの完成を、それゆえ地球上の諸国民のおのおののなかで完全に発展させられる人間性あふれる諸現象の際限なき充実を。》と冒頭で言われていることの別の仕方での反復である。それらなしでは、『陶冶』は荒唐無稽であり、そして『組織の学校構成』《エストライヒが批判しているハルトネッケの著書名から皮肉をこめてこう言われている》は人間を墮落させる。」

(3) エストライヒの体罰批判 — 論説「学校—『罰』としての体罰」⁶⁾より《ドイツ社会民主党機関紙「前進（フォアヴェルツ）」の1927年4月26日付け第194号に掲載された当論説において、人道主義の立場からエストライヒは体罰に反対している。かれはその際決して原則主義者でなく、現実の教師の苦悩にも理解を示した上で、なおかつ断固体罰を否定する。筆者はかつて高等学校教員の頃、体罰をふるった経験がある。実に情けないことであるが、それだけに暴力は暴力しか喚起せず、暴力をふるう者は非暴力を求める資格がないこと、体罰の無意味さ、反教育性を実感しており、なお一層エストライヒに共感する。》

論説の執筆動機が述べられる。「プロイセン教授大臣はわが同僚である教帯たちに、学校における体罰について数多くの質問を提示している。すなわち回答によっては、新しい法令を出す決心を『する』ために。その処置は民主的かつ称賛すべきことであるが（ただ至るところで両親にもまた聴取されるべきであり、その際もちろん懐疑でもってむかえられよう）、しかしそれはいくつかの危険を含んでいる！。というのは会議の職業上の秘密の雰囲気なかで、そのような機会においては圧倒的に元々自身の『権威』を憂慮する者の気分が現れ、そしてその場合常に責任への不安しか持っていないすべての不決断者は鎮静化的な結論を支持するからである。すなわち何も変わらないでほしい、反抗的な者を体罰によって理性ある言行へと導く『権利』を根本的にわたしたちから奪わないでほしいだけだ！。」

その論述から当時のドイツにおいても体罰がおこなわれていたことがわかる。エストライヒはその点をより詳しく論じる。「確かにどのような所でも今でもなお次の2つの類型に

言及される。《第1に》子どもは場合によっては体罰でかれの『優位性』を証明しようとする『雄々しさ』、そして《第2に》地上での神の代理人として、『反逆的』青少年を『虐げる』(あたかも、生活が自分からはもう虐げを引き受けていないかのように)ことを義務と感している(旧約聖書の)『キリスト』。《周知のように旧約聖書に登場する神ヤハウェは妬みの神である。》両者は、近いと見られているが、決してそれほど悪意があるわけではなく、それらはたいてい決して日常的殴打ではない — しかし『神聖化された特権』だというのである。かれらは事実、生徒たちの『上位者』であり、何も知らず、深層心理学についてまったく何も知らず(かれらはそのことを誇っている)そして青少年を『試験済みの、古い、ドイツ的な仕方』にしたがってとり扱うのだから。その際、その当の青少年たちは、かれらのなかに『屈強さ』の理想が生きている範囲で、一部ではまさに良いと感じ、そして体罰とその他の、家庭に通知されるのだが、罰の間の選択において、かれらはしばしば身体的罰を支持する決断をする。《ここで書かれていることは現代のわが国の教育界で体罰論議のなかでしばしば登場する体罰擁護論に通じている。エストライヒはそれを決して容認しない。》「しかしそのことは決定的なことか、あらゆる現代の心理学は、ここで抑圧によってどのような恐ろしい相殺的諸作用が巣くいるのかを知っている。体罰は教育の体系のなかに含まれているべきではない。家庭が親らしい模範的な自制なしに教師に、それでもってかれを連隊憲兵としつつ、お願いするその逃げ道より気楽なものはなにもない。家庭と学校は肯定的に、保護において、討議において、従事において協力すべきであり、青少年の『罰による』抑圧においてではない。それは未来の市民を生まない。したがって、人民教育大臣は学校における身体的懲戒を全面的に禁止すべきである。……」

次にエストライヒは自身がすでに数年前に体罰を扱っていた本から引用する。「わたしはその問題について、すでに1922年にわたしの本『罰の機関か生活学校か』《Strafenstalt oder Lebensschule.》で書いた……。「教師と生徒の間には次のような状況が存在しうる。つまり全クラスが即座の殴打を正当な回答としてまさに願望するような。そして家庭から暴力的であったりあるいは甘やかされていたりし、そして系統的に教師の感情を害する生徒たちが存在している。そのような場合における脱線に非難攻撃をもって対応する者は殴打する教師よりもっと大きな不正を犯している。そしてかれはそのような場合決して本物の吸血鬼を捕えたわけではないのだ。怠けてそして卑怯にも教卓にしがみつき、『規定』を『侵害する』ことを警戒している者は幾重もの魂殺害者でありうる。その魂殺害者は年々歳々若人たちを砕き落とし、汚し、浮き立たせ、そしてけしかけている。かれは名誉の寢床のなかであらゆる勲章とともに死ぬかもしれない。しかしその場合もかれを子どもたちの憎悪と憤怒が取り囲むのである。さらに、かれの生徒たちを愛しそして生徒たちもまた — かれのあらゆる誤謬にもかかわらず — かれを愛した者は悪意のある妨害が生じせしめた神経障害によって不幸な人となるかもしれない。《エストライヒはそのように体罰だけが問題なのでなく、それ以外にもさまざまな教育上の諸問題があることを明らかにしている。》したがって個々の場合は問題にならない。新しい精神、新しい良心性、新しい品性の獲得を。……《以下の論述では特にエストライヒの現実的な、楽観主義的な考えかたを知ることができる。》今日では確かに30年前から40年前に比べてほんの10分の1しか体罰を受けていない。そしてまた、より悪い状況にもなっていない。なにゆえ30年後から

40年後に、状況がより悪くなることなしに、それどころかまさにそれでもって状況がより良くなるように、今日に比べてほんの10分の1しか体罰を受けなくなりうるはずがないと言えるのか。道徳性は目立たないで出現してくる。個々の場合における人道性と理解を、しかし全体における良心の強化（それゆえ学校における総じて体罰の禁止）を！。家庭はより僅かにしか体罰をしなくなるようになり、学校もまたそうなり、教師はより僅かにしか不安をもたなくなりそしてより僅かにしか卑屈でなくなり、かれはさらにより僅かにしか体罰しなくなる。かれは別の仕方に対応することを知る。というのは学校と生活は互いに補完しあい、体罰なしにまたすべてにおいて確かにうまくいく！。それゆえ目標は子どもの人格の神聖保持でもある。しかしそのことは諸人格のもとでしか可能でない」。

エストライヒは最後に大臣に求める。その際、体罰問題とともにその他の諸問題への対応が要請されている。「むしろ大臣閣下はもう一度、1922年2月18日付けの学校処罰についての『徹底的学校改革者同盟』の請願書を読み直さない！。そこにおいては次のように要求されている。つまり、身体的懲戒は教授と訓育のなかであらゆる教育技術の破壊であるゆえ厳禁される。そしてかれが次に予定している法令がそれに相応していることが望まれる。他方かれはかれが教師の極めて過重な負担を再び除去し、学級定数を削減し、諸学校を生活と全体性の意味において改良することにすべての力を尽くすことで、あらゆる『尤もな』考えに応じているのである！。そのことがないと、あらゆる言葉の上での『改革』は国民への欺きのままである！。」

(4) エストライヒの植民地論 — 論説「植民地は国民的人格への教育者か」⁷⁾より《「新教育」誌1927年第6号に掲載された当論説では、エストライヒはドイツにおける報復主義諸勢力の諸要求を批判している。その要求のひとつとして以前のドイツ植民地の返還の要求があった。エストライヒはここで特に、ドイツの独占資本の最も影響力のある利益組織のひとつとしての在外ドイツ人クラブ〔Verein für das Deutschtum im Ausland〕【1881-1945】の陰謀と戦っている。そのクラブは特に学校で拡大していた。同時にその闘争をエストライヒはすべての植民地で抑圧されていた諸人民の自主的発展へのかれの支持と結び付けていた。さらにエストライヒの考えかたに現代のグローバル的な思想の萌芽があることにも注目させられよう。》

エストライヒは論説執筆の動機から叙述する。かれの叙述をとおして当時の学校教育における教授内容の反動性が、そしてその後の侵略戦争への精神的準備性が明らかになる。さらにここではエストライヒが徹底した反植民地主義者であったことが、しかしかれは教条主義でない現実的な説得の仕方をとっていることがわかる。「学校と印刷物のなかでドイツの植民地のためのアジテーションが流布している。それは在外ドイツ人の文化的な世話のための在外ドイツ人クラブの宣伝であるのとまったく同じく、反共和国的反動派の危険な武器でもある。というのは2重に、それにたいして青年と国民が喜んで燃え上がる『正義』《すなわち在外ドイツ人のためという「正義」、そして反共和国という「正義」》に訴えられるからである。在外ドイツ人にたいする温かさはその際次第に、しかし目標意識的に燃えあげさせられ、チュウトン人《「チュウトン人」とは元はゲルマン人の一部族のことを意味したが、ここでは「ドイツ人」と同義語と考えられる。》的一帝国主義的の火災が生じせしめられる。その火災は自身の過去の時間への想起を使い果たし《すなわち第1次世界大戦の悲劇を忘れさせ》そして常に逆の不正一願望行為において文化的な保塁を破壊するこ

とを迫る。したがって、わたしたちドイツに根を張るが、しかし人類的な理解のある人間はおおいに、どのような愚かさでもって若い頭脳が満たされるのかという懸念を体験するのである。しかし植民地的アジテーションはより劣悪である。というのはそれは方法においてだけでなく、かえって目標においてももまた知性や責任への犯罪であるからだ。それは簡単に理解できることである。というのは、ドイツからその植民地が、他の者にそれを与えるために奪われるとき、ドイツにとって不正がおこなわれていることが即座に明瞭になるからである。ドイツが正義、同権、威信、自尊心という諸理由から植民地をもたない無力さの汚名から解放され、それゆえドイツが再び植民地を — 国際連盟の植民地委任統治領を — 得なければならぬということは美しく響く。実際、そのことが問題になったとしたら、わたしたちドイツ人は他の者よりもより以上に悪いということはない。しかしまさに世界では他のことが、地球全体のすべての人民の自立化が、経済的価値が、将来が、教育が、植民化されている諸人民と植民している諸国家の魂が問題となっているのである。そしてその場合もはや小児的一形式的『正義性』が問題になっておらず、かえって未来発展の経済的—道徳的命令が問題になっている。」

さらにエストライヒは当時の世界で起こっていた民族自治意識の昂揚について述べ、それを抑圧する側に立つべきでないことを表明する。「技術文明の不和の種はいたる所で芽を出している。電気でもって照らされてそれはありえないようなテンポで葉を繁らしている。すべての幹は、いたる所で反乱が待ち伏せしていると感じ始めている。あととはただ一つの問題だけである。……つまり、いたる所でそれぞれの旗が掲げられるのはいつのことかという問題だけである。ドイツは、そこにおいてすべての種族、民族、人種の組織化された自治の来りつつある時代を肯定し、歓迎するかわりに、自らを植民地所有の暴力的な抑圧権力の連携者に — 何らかの植民地の離反に祝儀を与えるのではなく — なすべきか。

次のエストライヒの叙述は「土地なき民族」論を意識している。その論を基本的に肯定していることについては、評価が多々あろう。「ドイツ人民は移住諸領域を必要としているのか。確かに。しかしそれらは『植民地』、なにかわたしたちの古い植民地のなかに存在しているのか。虚偽のたわ言だ。あらゆる誠実な者は次のように譲歩する。すなわち、それらの移住諸領域は内的な植民運動のなかで、そして人口密度の低い（しかし国家的にすでに占有されている）大陸 — オーストラリア、カナダ、シベリア — における国際連盟に規制されたまとまった移住においてのみ調達されるべきであるというように。それゆえ、ドイツにおける大土地所有にたいする闘争を、荒野の集約化を、社会的 — 規範的能動性への国際連盟の改革を。しかし決して植民地デマゴギーではない。そのデマゴギーにおいては過去の『権威』が利を得るからである。」

以下は、資源確保の観点からの植民地必要論への反論である。「ドイツの産業は原料を必要としているのか。そしてその産出のために植民地なのか。戦争の場合への備えなのか。 — 少数の校長のみがそれらのたわごとを信じている。他の宣伝家たちはここでは意識的にペテンを働き、かれらは数的記述をおこなっている。そこで宣伝されていることは — 『科学的』諸雑誌においてもまた — いかなる分析にも耐えず、素人の検証にも決して耐えない。植民地—経済学者たちは自身で次のことを知っている。すなわち、わたしたちが世界経済の時代に生きていること、カルテル、トラストが地球をおおってい

ること、『民族的』—国際的資本が価格、生産配当、生産領域を自身で決めていること、確かに『ドイツの』植民地があれば、そこで原料は集中的に生産されうるだろうが、しかしトラストと列強が許す範囲においてでしかないことを！。原料の『廉価化』について、自給自足についてはわが国にとっては問題になりえない。いつでもわたしたちはそのような植民地の諸断片から切り離されうるのだ！。わたしたちの欲求の充足にとってそれらの—他の中心によって規制された—生産は決して十分ではない。……ドイツが世界—経済—組織に全面的な門戸を開くことに助力し、植民地—自給自足の自殺行為をおこなわないということに全面的に関心をもってくれたなら！。……」

エストライヒはすでに1920年代にアフリカの民族解放闘争に期待をよせている。またかれのグローバル的視点も明確に出ている。「アフリカは領土内での非阻害性を要求している！。そしてアフリカはまた誰よりもまさに、すべての領域、自然資源、原料の『開拓』を憂慮している（その上その『開拓』によって人類は幸福にされず、かえってよりはやく—なんらかの形態の社会主義へと強いるのであるが—地球的規制の問題に直面させられている）！。—そのように合人類的に人類の問題を考える者のみが人類の友であり、そしてわが国民の友である。その友はその際—かれがすべての大陸におけるかれの諸力の過剰を人類的課題のために国民エゴ的な隠れた意図なしに用いているとき—、……地球の広範な領域のエネルギーと眺望の保護をおこないうる！。別の道はわたしたちを奴隷に……そして暴虐者に……する！。」

最後にエストライヒは次のように思い上がった大国主義意識を断罪する。「わたしたちドイツ人は名誉ある人類政策をおこなっているが（そのことは雄大な使命であろう）、しかしわたしたちは底無しの詐欺師である！。今日なお他の家々に出掛けそしてそこにおいて、教育がなされていないゆえに、教育しようとする者は、おそらくすぐにすべての家から追放されよう！。フィヒテの意味におけるドイツ的気質は植民地的優越性の除去を求めている！。」

(5) エストライヒの反動的学校政策に反対する統一戦線論 — 論説「緊急戦線」⁸⁾より
《「新教育」誌の1927年第12号に掲載された「緊急戦線」論説から、エストライヒとかれによって指導された同盟が反動的「ブルジョア—ブロック政府」の総攻撃にたいする抵抗戦線に参加していたことがわかる。その政府はドイツ国民党の内相でありそしてプロイセンイセンのユンカーであるヴァルター・フォン・コイデル（Walter von Keudel【1884-1973】）によって提案された「暗黒の全国学校法草案」でもって学校制度のなかの最後の進歩的諸要素を排除し、学校制度の社会的・地域的・宗派的分割を最終的に承認しそして学校制度を最終的に反動的・教権の権力に売りわたすことを任務としていた。その目当ては人民大衆と教師の抵抗にあって挫折した。》

エストライヒはまず当時の共和国議会の状況について述べる。「共和国議会のなかで『苦闘されている』。ある者たちは事実の論理を引き続き追跡し、他の者たちはかれらの熱狂にとらわれており、また別の者たちは正当な信念なしに反対しており、そして若干の者は朗読している。それらの『人民の代表たち』は一人も伝達のための管（Sendung Gefäß）ではなく、かれらの議席について不安をもち、そして半分は党の神々に、半分は有権者に、すなわち1928年《次回総選挙が実施される年。ちなみに前回は1924年であった。》に横目を向けている役員（Funktionär）である！。」そのように、当時の議会の代議士たちの墮落ぶ

りについて述べた後、エストライヒは当論説執筆の動機を、いつものように遠回しに明らかにする。「諸君がかれらを《共和国議会の代議士たちを》さらにより以上にドイツ学校の死体埋葬者にすることを欲するなら、ドイツの紳士・淑女たちよ、諸君はやろうと思えばできる。しかし害悪を防止したくないのか。皮肉っぽく次のように説明した『自由世俗学校』論文執筆者のように考えてみよう。『全国学校法草案においてわたしたちにとって興味あるのは世俗的学校についての条項のみである』。諸君は等しくかれに『抵抗の雄叫び』についてほほ笑み、そして諸君もまた『諸君の』学校の法的承認の『より確実な』避難所を欲するのか。その場合諸君はペテンにかけられたペテン師であろう。というのは諸君の獲物は手の中で溶けてなくなってしまうだろうから!。」

エストライヒはしかしコイデルの反動的な学校法案の提出を逆に良い機会であるとも理解している。もちろん正しい抵抗戦線が形成されればのことであるが。ここではエストライヒの柔軟で、現実的な統一戦線論も明確とされる。またその際の徹底的な学校改革者同盟が果たしうる役割についてもふれられている。つまり、「人民大衆を『教育化(pädagogisieren)する』これ以上良い機会はないかつて一度もなかった。ただ正しく着手されねばならないのみである。わたしは今や多くの場所で、一連の客観的—感激的演説者たちが、ことさら無関心な者たちのなかで教育思想についてもまた興味を喚起させようのを共に体験している。わたしはそれらの諸集会において常に大胆不敵に宣伝してきた。今や青黒色の陣営《中央党、ドイツ民族国民党、ドイツ国民党およびその他の間のブルジョアの連合政府が考えられている。黒色は中央党をさし、青色〔本来的にはプロイセンの青色〕はドイツ民族国民党をさしている》の『全国学校法』に反対するすべての者の緊急—戦線が重要である。そのことは今や、 — 国民党の善意の部分から KPD にいたるまで — すべてのことを乗り越えて、学校のいかなる宗派化も提起せず、いかなる新たな教権の監視も提起せず、いかなる子ども敵対的教育も提起せず、諸教会や諸党派の独善家学校のための共和国の予算のいかなる浪費も提起しないすべてが軍勢に結集することを意味する!。この戦線は緊急—戦線でしかない!。この会戦が勝利すれば、つまりそのコイデルの全国学校法草案がその先行者たちと同様に冥府に追いやられれば、すぐに抵抗—結集体のなかで最良の新しい学校形態とその内容をめぐる名誉ある『内的』戦争が再び始まる!。醜取引ではなく、わたしたちは指針、綱領、協定を欲しないし、明日には破されるに違いない怪しい平和を欲しないし、わたしたちは明確な、新鮮な闘争の喜びを欲する。特にわたしたちは徹底的な同盟員はわたしたちの弾力的—生産学校を欲しており、そしてかくしてそのような一日連合の最良の事実に接合剤である。というのはわたしたちはまさに議席も地位も望んでいないからである。」

さらにその統一戦線論が続けられる。「わが国の青少年と未来を守って、教権的魔王を防ぐためにのみ、わたしたちはあらゆる文化的意志の持ち主たちと同盟を組む。それ以上ではない。」もちろんそのような考えに反対する者もいたようである。「しかし今や堤防—兄弟性《教権的魔王を防ぐための連帯性のこと》を妨害し、侮辱し、悪用している者に禍いあれ、その者は沈うつにする—大潮が家々を襲うことの原因であるから!。」

それにたいしてエストライヒの緊急戦線に賛同し、参加する者は次のように評価されている。「生命が躍動している者、つまり流動化や掻き混ぜ、党派混合の混乱が新しい、より良い分離の前提であると信じている者は、今や民衆を呼び集め、大ラッパの響きとともに

ジェリコ《ヨルダン北西部の村。紀元前数千年から存在した古い村で、強固な城をもっていた。》の壁に突進しているのである。／。—わたしたちはそのこと、つまり演説者の列が誘惑しそして満足させていることを見届けている。」

さらにエストライヒの統一戦線にたいする考えが別の視点から言われる。「明確な目的のための諸党派—コンビネーションはブルジョアジーとプロレタリアートをして客観性を信用せしめ、そして党派の利用の当面の—断念は強力な同意をもたらす。／。それらの試みは、教養ある人々がそれをおこなうとき、すべての人を栄えさせる。大衆は大きな信用と強力な意志に渴望している。／。」

エストライヒは当然のことであるが、政治集会の教育的意義を理解していた。「完全な政治的方法学が新たに奨励されている。対立的諸主張の純粹の緊張の領域としての、民衆陶冶の場としての民衆集会は、その他の集会のように、敵を侮辱するための党派集会で口角泡を飛ばして語られることや、あげすけに言われることを基準にした場合、傾聴者にとっては救済である。『論争』の口論や叫び声が大切なではない。短い演説をする人たちの集団は自身のなかに闘争と友情を隠している。そして『正義が成長しうるように、悪の没落を』という目標における共通の意志は活気ある生命である。／。今や民衆に呼び掛け、民衆に青少年に鎖をかけたり萎縮させたりすることにたいする敵の連帯—競争を示し、そして次のことを体験せよ。すなわち両目が輝き、理性が増し、そして学校と民衆の子どもたちがそこから利益をえることを。」

次の叙述から、むしろエストライヒたちの闘争が成功しそうであることがわかる。しかしエストライヒは慎重に念をおしている。「全国学校法草案が採択されうるのは、民衆がそれを気にいる場合のみである。／。至るところで自由思想の持ち主たちの合唱が憤激の声をあげており、その合唱が、そこにおいては自己規律があることを証明しているので、選挙民にたいする信頼が増大し、被選挙者の議席を求める全身が震えている。／。民衆よ、きみはきみの学校を築いている。／。次のどっちかだ。危機を鑑みてきみの責任力が蘇生し、そしてその不名誉な学校分割が中止されるか、— さもなくば、民衆よ、きみたちは、きみたちの若者に力をもたせてではなく、いくつかの金言をもたせて世界のなかに送りこむというきみの運命に耐えねばならない。／。」

「あらゆる箇所で緊急—戦線を形成せよ、聖職者もどきはドアの前にいる。／。緊急—戦線を形成せよ、それでもって教会化のかわりに宗教化《いうまでもなく、エストライヒ流の「宗教化」である》が始まるように。／。そして『徹底的学校改革者同盟員』はその抵抗会戦の生来の旗手でありそしてパイオニアである。その抵抗会戦においてあらゆることはかれらが優位にあることを教えている。というのはかれらは何が到来せねばならないのか知っているからである。／。」

「『ベスタロッツ年』《1927年はスイスの偉大な教育者の死後100年であった。》は、次のような言い回しで大みそかを迎えるならば、祝福をもたらしえよう。つまり、学校は全民衆にとってかれらの全存在のために自由である。／。」

3. まとめと今後の発展課題

①エストライヒの論説を熟読すればするほど、かれの教育論を安易に規定することの無意味さを感じる。かれは常に一定の時点におけるさまざまな学校政策と教育の諸問題と真

剣に対決し、自らの人道的な見地から対策を具体的に提出している。

②SPD 首脳部の文化政策を批判する厳しさはかれが SPD 党员であったがゆえに、むしろかれの責任感を感じさせ、組織のなかで生きざるをえない近代市民としての在り方を教える。

③エストライヒの才能論については、第2報で紹介した才能論もあわせて参照してもらいたい。かれが批判したハルトナッケが後にナチスの協力者になったことを考慮するとき、その批判の重要性がより以上にわかる。またその論述は、植民地論にもみられたかれのグローバル的理解と意識を教える。

④筆者は体罰にたいする立場もまた、教育(学)者にとっての試金石の一つであると考ええる。ただしそのことが、現実に教壇にたつ教師の実際の苦悩にいっさい配慮がなされずに、理想主義的にいわれるとき、やはり説得的でない。エストライヒはその点を克服している。

⑤最後の反動的学校政策批判については、労働運動の陶冶政策と教育学におけるエストライヒの位置を考察する予定の次報で再度検討したい。

(平成2年8月1日受理)

注

- 1) 《第1報》「ワイマール共和国初期におけるパウル・エストライヒの反帝国主義的・民主主義的教育学叙述」, 愛知教育大学教科教育センター『研究報告』第13号所載, 1989年3月。《第2報》「20年代前半, 学校反動に抗してそして陶冶制度の民主主義化を求めたパウル, エストライヒ」, 愛知教育大学『研究報告』《教育科学》第39号所載, 1990年2月。《第3報》「『人民文化のための学校』を志向するパウル・エストライヒ」, 愛知教育大学教科教育センター第14号所載, 1990年3月。
- 2) Paul Oestreich : Ein Fußtritt. in : Paul Oestreich : ENTSCHIEDENE SCHUPREFORM - Schriften eines politischen Pädagogen - . Eingeleitet, ausgewählt und erläutert von Helmut König und Manfred Radtke. Volk und Volkseigener Verlag, Berlin 1978. S. 93f.
- 3) Paul Oestreich : Die Begabung der Begabten. in : Enenda, S. 95ff.
- 4) Vgl. : Enenda, S. 160.
- 5) Vgl. : Ebenda, S. 8ff.
- 6) Paul Oestreich : Prügel als Schul-“Strafe?” in : Ebenda, S. 97ff.
- 7) Sind Kolonien Erzieher zu voklicher Persönlichkeit? in : Ebenda, S. 99ff.
- 8) Die Not-Front! in : Ebenda, S. 101ff.